帯広市新図書館オープン

広さが道内の市町村図書館では３番目、旧図書館の約４倍になった館内を見学する利用者（３日午前11時ごろ、山下僚撮影）

テープカットする左から横田副支庁長、中村道立図書館館長、有安さん、鈴木議長、砂川市長、松原康代さんと舞ちゃん、船津委員長、高橋副会長

駅南に移転 蔵書は35万冊

帯広市西2南14の帯広市新図書館（倉口俊男館長）が3日開館した。午前10時から、関係者が出席して開館セレモニーを開き、午後1時からは貸し出しが始まった。構想から10年余り、市民が待ち望んだ帯広・十勝の情報発信・生涯学習の拠点。見学した市民は館内の施設に目を見張り〝知の殿堂〟の誕生を喜んだ。（39面に関連記事）

1階エントランスホールで開かれたセレモニーには、市や市議会関係者、一般利用者ら約150人が出席した。砂川敏文市長は「十勝晴れの中で市民待望の開館を迎えられたことを皆さんと喜びたい。環境に配慮し、人に優しい設計の素晴らしい建物。生涯学習の拠点として長く愛される施設になり、多くの市民と育てていく図書館にしていきたい」と述べた。

来賓の鈴木孝昌市議会議長が帯広の都心部に力を与えてくれることを期待したいとあいさつした。シンボルマークをデザインした帯広三条高1年、有安友美さん（16）に表彰状が贈られた。テープカットは砂川市長、船津龍之輔市教委委員長、鈴木議長、中村照男道立図書館館長、横田実十勝支庁副支庁長、高橋則子帯広図書館協議会副会長、有安さん利用者代表の松原康代さん（38）と舞ちゃん（4）親子がはさみを入れた。

続いて見学会が開かれ、セレモニー出席者や市民が、職員の説明を受けながら館内を見て回り、明るく広い施設に並んだ図書や情報検索機器に感心していた。

新図書館は鉄筋コンクリート造り地上3階建て（地下1階）で延べ6545平方㍍。道内市町村図書館では3番目の広さ。総事業費は約35億円。蔵書数は旧図書館より約4万冊多い約35万冊でスタートする。（安田義教）

まちづくりで「楽集会」 「町民力」で意見を交換

本別

【本別】十勝毎日新聞社、町、町教育委員会主催の初イベント「いいひと いいまち」を考える楽集（がくしゅう）会」が、2日午後7時から町体育館で開かれた。十勝毎日新聞の昨年の年間キャンペーン「十勝の人間力―地域連携のひとづくり」の記事を題材に、協働のまちづくりを高める「町民力」について考えた。テーマは「ほんべつの町民力を語る―実感してますか？協働によるまちづくりの輝きを」。町歓（よろこ）び実感プラン推進協議会（今野公司会長）が後援し、町生涯学習地区推進委員の研修会も兼ねた。

この日は推進委員や一般町民約150人が参加。高橋正夫町長と十勝毎日新聞社の中橋敏明編集局長のあいさつに続き、第1部では本別カトリック幼稚園の西岡聖奈ちゃんと島貫紗智乃ちゃん、本別中央小6年の加納靜さん、勇足中2年の矢野拓磨君、本別高3年の近藤邦彦君、個人で市街地の清掃奉仕活動を続けている本間正捷さんが「だからこのまちが好き」と題した作文を発表した。

第2部は、記事でイギリスの市民教育を紹介した杉原尚勝記者、町総合教育研究所社会教育部会長の上田禎子仙美里中教頭「同協議会専門委員の小山忠弘札幌国際大教授が意見を交換。

小山教授は「行政と町民が対等に物を言える関係が協働の条件」、上田教頭は同校の実践例も交えながら「大人の姿を見ている子供たちの間にも、協働の芽は確実に育っている」と述べ、杉原記者は「本別町が管内自治体で先駆けて使った協働の言葉にも、イギリスの市民教育と同じく地域の一員である自分たちに何ができるかという意味が込められている」と語った。（岩城由彦）

地域がさらに輝くための「町民力」について考えた楽集会（折原徹也撮影）

編集余録

札幌市の上田文雄市長は、夏のオリンピックの札幌開催について「招致の名乗りを上げない決断を下し、市議会で表明した。市民アンケートでは、開催反対がわずかに上回ったものの、自民党、経済界など推進派の強い働き掛けがあっただけに、苦しい判断であっただろう▼ここで開催地招致の是非を論じるつもりはない。上田市長は、言うまでもなく十勝の幕別町出身だが、オリンピック推進を主張する札幌市議会最大会派自民党幹事長鈴木健雄さんは、幕別町の隣の池田町の出身であることに、興味を覚えるのである▼しかも、上田市長の父菊一さんは、かつての幕別町議であったが鈴木市議の父輝一さんも池田町議として活躍していた。鈴木市議は、息子を政治家にさせたいという父の強い思いで、地元十勝の本名武衆院議員の秘書となり、本名さんの退任後、札幌でこつこつと努力、市議当選3期目。今や保守派のホープである▼野党の幹事長として、オリンピック開催を断念した上田市長には、当然ながら論戦を挑むであろう。いうなれば札幌市議会での十勝人同士の対決である▼政治的立場の違い、オリンピックをめぐる開催地の利害得失など、主張は真っ向から対立することは、第三者から見て分かり切っている。札幌市という本道の中心都市で十勝人が活躍するのはうれしい。しかし、最後は同郷人として共有するものを願うばかりである。（鑄野侑）

十勝人対決

中央省庁に厚い壁

「権限＋財源」移譲に強く反発

北海道の悩み

道州制の虚実 4

■回答は「想定内」

2月23日の道議会終了後の記者会見。高橋はるみ知事は前日、東京で開かれた自民党北海道道州制検討小委員会（遠藤武彦小委員長）について聞かれ、「想定内のことだった」と厳しい表情で答えた。道への権限移譲について中央省庁が示した回答が、否定的な内容だったからだ。

道の道州制特区案では、中央省庁の出先機関を統合し、次の段階で道を加えて道州を設ける。道が強く要望してきたのは、中央省庁の本省の権限を財源と一体で道州へ移すという点で、道幹部は「権限移譲がなければ統合しても中央省庁の下請け機関にとどまる」と話す。

立法権限を道州に移すのは、憲法に抵触する。道州では、国の法律を廃止し、条例の運用で道独自の仕組みをつくる。例えば、国の法律で別々に規定されている幼稚園と保育所を道州の条例で一元的に運用させる。財源は、地域の税収で賄った上で不足分を補償する仕組みを提案。「使い道をしばらない一般財源で不足分を補てんしてほしい」と主張してきた。

さらに、道州制に絡んだ国の行革の動きも警戒。国の出先機関が抱える職員数は道開発局だけでも約6200人に上っている。道では「必要な範囲で移籍や出向を求めたい」としてきた。

■冷ややかな反応

しかし、中央省庁の道州制に対する反応は冷ややかだった。道が「前進と受け止められる」と試案を評価。しかし、権限移譲について中央省庁の反応は変わらなかった。

試案には、道開発局の主要事業である道路、河川が含まれる。同局の本多満局長は同月8日の定例会見で「道路、河川事業は、全国的な視点からの集中投資や危機管理対応、高度な技術が求められ、国の機関でなければ責任を果たせない」と反対の考えを示した。

道州制特区は、小泉純一郎首相が高橋知事ら持ち掛けて始まった。北海道は複数の県を合併させる必要がなく、先行実施がしやすい。高橋知事は「先陣を切って実施し、国民挙げての論議を活発にしたい」と道庁の反発のほか、北海道特から市町村への権限移譲など積極的に取り組んできたが、予想以上の中央省庁の壁の厚さに、札幌市内で先月12日に開かれた道州制のシンポジウムでは「霞が関の人（中央省庁）は仕事が大好きで、権限は離してくれない」とやや皮肉交じりに話した。

特区の先行きは、中央省庁の反発のほか、北海道特から市町村への権限移譲など積極的に取り組んできたが、予想以上の中央省庁の壁の厚さに、札幌市内で先月12日に開かれた道州制のシンポジウムでは「霞が関の人（中央省庁）は仕事が大好きで、権限は離してくれない」とやや皮肉交じりに話した。道が「前進と受け止められる」と試案を評価。しかし、権限移譲について中央省庁の反応は変わらなかった。

試案には、道開発局の主要事業である道路、河川が含まれる。同局の本多満局長は同月8日の定例会見で「道路、河川事業は、全国的な視点からの集中投資や危機管理対応、高度な技術が求められ、国の機関でなければ責任を果たせない」と反対の考えを示した。

道州制特区は、小泉純一郎首相が高橋知事ら持ち掛けて始まった。北海道は複数の県を合併させる必要がなく、先行実施がしやすい。高橋知事は「先陣を切って実施し、国民挙げての論議を活発にしたい」と道庁の反発のほか、北海道特から市町村への権限移譲など積極的に取り組んできたが、予想以上の中央省庁の壁の厚さに、札幌市内で先月12日に開かれた道州制のシンポジウムでは「霞が関の人（中央省庁）は仕事が大好きで、権限は離してくれない」とやや皮肉交じりに話した。

特区の先行きは、中央省庁の反発のほか、北海道特から市町村への権限移譲など積極的に取り組んできたが、予想以上の中央省庁の壁の厚さに、札幌市内で先月12日に開かれた道州制のシンポジウムでは「霞が関の人（中央省庁）は仕事が大好きで、権限は離してくれない」とやや皮肉交じりに話した。道が「前進と受け止められる」と試案を評価。しかし、権限移譲について中央省庁の反応は変わらなかった。

試案には、道開発局の主要事業である道路、河川が含まれる。同局の本多満局長は同月8日の定例会見で「道路、河川事業は、全国的な視点からの集中投資や危機管理対応、高度な技術が求められ、国の機関でなければ責任を果たせない」と反対の考えを示した。

道州制特区は、小泉純一郎首相が高橋知事ら持ち掛けて始まった。北海道は複数の県を合併させる必要がなく、先行実施がしやすい。高橋知事は「先陣を切って実施し、国民挙げての論議を活発にしたい」と道